七部[illegible]下巻

808-5

俳諧資料カード	
年代	文化五年
編者筆者	
書名	俳諧七部集
備考	下巻 炭俵ほか

（下垣内蔵）

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉の軒にわり
かよひ瓦の窓をひらき心の泉をくみて十とせあまり
の文字の師風をうけゝある人々中にや家隣りあまりの
よせる秋の二三子序に結りて出桶にもりし炭をおこし
菴主これに口鈔ほとけ宋人の手斧らすよへる茶壺
あらんと志の形着に糖のさゝやきなるを聞とき権に
あとしつ金屏の雲の古きにわれ銘と言よりあらひ
いづる初の心うら耳に入りてくもらへるのみ藁の乃あ
ともの足に擱のすりたるやこれを志ひ立玄の白
のつと出より秋の月またしらかゝ帰けれハや吟行
並ありを貴すけあちの二十あまりかるとあ人

きこえるまゝ詠哥の絵をあやとり枯木なれハ又くぬき炭
の節みくさりしを鄙ぶりをかく佗るハ
詩の正義にいへる五つの声に賦る八雲の道
えひまハ句しれと例の宗匠をあなる者も寂霜より
ふありつゝ又すみしひしも白芭蕉翁旅行の餞
やりかれぬるを挙て再会の期を契りて此木の葉の
るにいたくこのみこゝろの秋まり古桶の炭くぬき
炭の帰る斧をうちくだきつるにうつしに炭あつかひとこつる
ハ鄙也なりと枯こちかるに子供をうてそよと初
るやうや此志らをえて蜘蛛と即ち此の名にて宜
名をてまたけれぬをけるをとそ元禄の初冬
そめ鄙ぶりのつかへとつける境をハ

わらしへのしとゝちをはくなむ
元禄七乃年夏閏さつき初三乃日　素龍書

むめかゝにのつと日乃出る山路かな　芭蕉
処々に雉子乃啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　野坡
上乃たよりにあかる米乃直　芭蕉
宵乃内はらはらとせし月の雲　仝
藪越はなすあき乃さひしき　野坡
御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

奈良かよひおなしつらなる細基手　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋乃事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくはかりのこる名月　芭蕉
はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡
門て押るゝ壬生乃念仏　芭蕉
東風々に糞乃いきれを吹まはし　仝
たゝ居るまゝに肱わつらふ　野坡

天相　向附　有心　天相　平話　有心　附句　逆句

有心
起情
有心

江戸乃左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方々に十夜乃内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつて寝たる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て　芭蕉
又このはるも済ぬ牢人　野坡
法印乃湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて青麦の出来　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雑炊　芭蕉

起情

千どり啼一夜一夜に寒うなり　野坡
未進乃高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て　野坡
屏風の陰にみゆるかけ盃　芭蕉

挙句引神

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あざみや苣に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外をざかりに囲ふ相撲場　嵐雪
細々と朔日ころの宵乃月　利牛
早稲も晩稲も相生に知る　野坡

こゝし　逆句

平活

今案

泥染を長き流にのばすらん　嵐雪

あちこちられて昼寝するなり　利牛

隣からなる嫁を伴よ添　野坡

てうしくくも参るのわり　嵐雪

思谷乃九ちらハ皆請至護法　利牛

五百のうけを二度に乞なり　野坡

綱ぬきされいかの役ある宮ぬし人　嵐雪

人のさりしぬ雲ま思ひあり　利牛

新役乃難を下せえ日のこゑて　野坡

飯た中なる岸を照る月　嵐雪

漸と雨降やみて秋の風　利牛

鰯頭みてハ又鮓かく　野坡

有心

幸云乃ふるしむ數を墨ぬりて　嵐雪

抱揚る子の小役をさせる　利牛

くりくりしと河内乃茶摘送り盆　野坡

心みつらし若乃せんかく　嵐雪

婿らしく娘の世をうき嫁まかり　利牛

ここしし乃丸れハ何も囃のぬ　野坡

手締の翁まはたくをさするらん　嵐雪

叶らいわいの小倉るふよる　利牛

黍乃穂ハ殊に風ま吹倒連　野坡

るる場乃喧嘩の後ますむ月　嵐雪

出いとうし陀見て人になる　利牛

今平夜也出くらハ作と夕に　野坡

平話
今紙
返し場

立

賣ならうつてやんをなたる文證　孤屋
日からしとゆふのふり出し　利牛
鎌倉乃便きかせに走らする　野坡
うへさま乃志れぬ細引　孤屋
柿ある畑をしめゝ家乃付　利牛
まさうひ残る正月の餅　野坡

深川にまかりて

空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
昼乃水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほとの雨降て　岱水
そつとのぞけハ酒の最中　利牛

時分
返し場
おはしく

寝所に誰もねぬ宵の月　芭蕉
どさりと塀乃ころぶ秋風　孤屋
きり〴〵す薪乃下より鳴出して　利牛
晩の仕事乃工夫するなり　岱水
妹をよめにやらうとおもひ居る　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて賣出す　孤屋
この春ハどうやら花の静なる　利牛
よれし柳猶今は細して　岱水

宮乃紅吹ちらしある艀月　孤屋
ふとん丸くゝもの紐ひかる　芭蕉
不届な隣と中のわるうなり　岱水
よりちか婿をとへあらしん　利牛
浪人のひとつれ宿しぬちうす　芭蕉
雪ふれはるかりよをとう部める　孤屋
菴のすゝんをらんてねれ汗せ笠　利牛
宮つを送りて掻ら嶋基屋　岱水
今のまれ宮れ雪さとさしてうつ　孤屋
秋貢まんふとほゑてねまり　芭蕉
息災て祖父の生つがのうれしさよ　岱水
堪忍すしぬ七夕乃照り　利牛

名月のまれ合なき芋畑　芭蕉
けふしくゝりし荷ふ荷鮎　孤屋
このころき宿の通りもすきくし　利牛
山乃根際乃紐くれかゝたり　岱水
まう雲ふうよく風の吹出して　孤屋
晒乃上宗日より精叔　利牛
岩つんふし女子たちりつまさえて　芭蕉
余乃九さきなしれ茎ゑん乃て　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛

各九句

百韻

挙句　平活　有心　逃句　有心　今叙

百韻

甚坊　含新　有心　其人

子は裸又もてしまゝく早苗舟　利牛
岸のいはらの真白まさく　野坡
雨あかり珠数懸鳩の鳴出て　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色の紬たくりよせ　野坡
一つの鑰[illegible]人あつ　孤屋
蓼乃丹手茶乃茄汁わるくは　利牛
掃を除のしり櫃ちるらし　野坡
ウ ぢしめきは北井てより出るりほあつ　孤屋
坊主なれしやくりに平込　利牛
松坂や矢川へはいる通り　野坡
一 吹まし勝もつき関乃夜　孤屋

一 十二三弁乃衣裳乃ちさくらに　利牛
本堂はしほまきはとろくし　野坡
日乃あたる方はあかるむ竹乃色　孤屋
只奇麗ははロすくみ　利牛
近江路乃うらふ詞を知て　野坡
天気乃相よ三ヶ月乃照　孤屋
料理なしあはれたもれむらむしこ漬　利牛
椋の実落る屋根くさる也　野坡
帯賣乃庵主連立無尽なり　孤屋
此新紙からの人をまつく　利牛
ほかしとこつ免乃いはれ出　野坡
ほかしはいへの結まてあかく　孤屋

起情　甚人

ない神を妙にさゝれける聟むすめ　利牛
舞羽乃糸もよれつゝ鼠　野坡
けしよ為武士の茶のつまみ　孤屋
尚よりふよりいちむと大鞘　利牛
切蛆の喰倒したる植たばこ　野坡
くつゝりと納豆を仕込広庭　孤屋
瘧日をまぎらかさんと待て居る　利牛
藪でなげける鶉の重さき　野坡
つきあひの名をも呼しぬ帳やら　孤屋
となりの喜せん喜き斧の音　利牛
分れの身様子貢来る古柱　野坡
すゝまき此世此あまることつてん　孤屋

令釈　妙物　色之　甚人　空撹

ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸てしらみし水風呂下やぬれ　野坡
伐透た椛と檜のすまあひて　孤屋
赤ひ小宮はあたらしき内　利牛
濱迄ハ宿の男か荷をとらえ　野坡
師走比丘尼の諷乃聲よ　孤屋
餅搗の日を通し覚えて　利牛
天満の状を又忘れけり　野坡
廣袖をうへにひつぱる舩の宿　孤屋
むく起にして参る観音　利牛
燃さする薪を尻手に指くべて　野坡
十日五夜の月ふりまかりしすな　孤屋

同小まえすみる
附舟り

有心

甚人

今秋

めく場

三

内蔵にかきほけ塀の咲えたり　利牛

弦打颪海雲とる桶　孤屋

機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡

小昼のころの空の静さ　利牛

楓端に膝ぶしを突出て　孤屋

濁乃繕ふけを急ぐ人がら　野坡

麦畑の替地に渡る傍示杭　利牛

賣手もしらぬ新茶の直段　孤屋

指毎もこの指またなれたれさふ　野坡

又此肩の古きずいたく也　利牛

岐まる大事の上の二番泥　孤屋

冬まさみんへの篇しかりかり　野坡

蒼雲のこよりに初手を鎖出し　利牛

一つくなりに鶴の雲瑞　孤屋

瀬行にも嶺引ちぎる蝦の肉　野坡

なめすむとる豪の膝あおび　利牛

めをと縫くを打に鳴る駒の姿　孤屋

又ためみして無漢なりさく　野坡

かくさされ中の己丑日をまつる　利牛

入替る人手に味みる豆を打に　孤屋

まつちこの打に本縁結の新田川　野坡

此茶座の見ゆる宿の客待　利牛

ほやりとりんとほとりす雲あされ　孤屋

ふ葉茶に餘りける熱汁　野坡

いく坊

起情　有心

一寺の門引越て居る櫻原　利牛
尻暖まりける道のりよく　孤屋
おちつくかうらゝし時の為の暑　野坡
入舟つく肉乃六月　利牛
拭ふくお上の資居ひらける　孤屋
出云つのる細うしろひ　野坡
名
大きのあたくに畑乃物のけて　利牛
何年菩提しらぬ板乃末　孤屋
我今まで同心乃あとを継　野坡
九九十日温をわけらふ　利牛
投方もかくる立まれめつさし　孤屋
見とたし某舟鱸よう儲まる　野坡

有心　逃句

里離れ川徒引乃わかつまく　利牛
やたらこのものを姥の襟かりと　孤屋
之まつりる銷日志まの精進者　野坡
うんちう呆しる八ちおち空　利牛
丁寧に仙臺僕乃口のつり　孤屋
訴訟ふ添く土まかまる節　野坡
夕月に堅者の名をかけかけつり　利牛
包て届る鮭乃やきもの　孤屋
名ウ
雲先を今年ま風に欲ありて　野坡
もちや仕事もかゝらぬ押もなく　利牛
果樹の話出羽をとうきさうり　孤屋
妻抱ぶりてこゆる逢坂　野坡

減もまぬ瓢箪座乃ミせ乃眉さし　利牛

門違ひ町乃桐淡く　孤屋

彼岸ゟつき乃花の咲きく　野坡

三くなくうて折りしるゝ哉　桃隣

春之部發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　蕉

東風や山かゝりつくる三の松　濁子

みちのくの関部の宵の海苔　杉風

春や祝ふ丹波の鹿も帰るとて　京　去来

乃まれぬ供もつれて　膳所　正秀

いそかしき野老雀乃かきそえし　大坂　洒堂

曙やほのかにかすむ梅の花　惟水

桜いさ門徒姿の袖　沾圃

月下に中乃洞や年の市　孤屋

初日影まつ立もつれさうや　利牛

春の親の宿の鳥　野坡

梅

梅一木つれもなく姿かな　素沾

むめ咲や細乃枝木のまさり　曲翠

むめの香に　支考

宵れつくとつくつく

むめの香や　伊賀　土芳

梅咲て湯屋の山崩をかざりけり　利牛

赤みその口を明けりむめの花　游刀

みなしてや咲かゝる梅の花　埜坡

白魚を娘すかれる妻戸の脚　杉風

むかしにしもの七草をそろえて

さゝれ石も顔に白つる薺かな　其角

七草や粧ひかけて切刻　埜坡

うちむれて若菜摘まに膝かゆし　仙杖

深川の文かたらんに

繊月一夜ても有てきこうふ　去来

大そらや棟乃出はまる繊月　伊 丈草

おぼろ月まちまちさかれぬ頭巾かな　仙花

深川乃草庵

長閑さや寒乃残りも三ケ一　利牛

十五日立や睦月乃古手売　大坂 之道

猫乃恋初手から鳴て哀也　埜坡

ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うくひすにほうと息する朝哉　嵐雪

鶯に薬をしへん聲の文　子角

うくひすの聲に起行雀かな　桃隣

うくひすや門はたまたま豆腐売　埜坡

鶯の一聲も念を入にけり　利牛

柳

これほどもへらして植し柳かな　湖夕
はまごし待のさひしさは柳かな　素龍
又人にかくして来てくらし柳かな　野坡
せきとめの尾ハつんさら柳かな　一風
町なかへ出てくる宿乃梢かな　利牛
傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土手の外蘿にちり込椿かな　孤屋
枝長く伐らぬ竹を椿かな　湖春
急ぐ乃かくるまつけ込椿かな　曲翠
猫にうきみせく芳つばき　嵐雪
たるのねも絲家繪の赤椿　支考

ちらよ掃除せくうら椿散にかゝり　野坡

花

まへの花つまよりつゞりしまゝくるゝ
幕寺はいまおのゝするかたのあまく
なりけるうちそれにかけをよのさて
四つごきのそろはぬ花見心かな　芭蕉
めつらしや内て花見よ夜の桃とも　杉風
うかうかと来ては花見の留守をあれ斗　丈艸
何かしのかけの座敷花見に備りて
伴下もうれしき乃花見かな　素龍
苗よせや白きものらを実はなせ　去来
鞍かけし乃湯を浮藤や庭の花　孤屋

あさむくと云宮人の青乃かしさかな　荊口
たゝかれても梅のこらい　きなら顔かな　斜嶺
柳の髪溶出もとり来しや花の中　北枝
牡丹まく人へりや顔をはさめらう　湖春
あるとなりし花は五枚のきらゝかな　其角
花かゝも毛虫になりし家桜　光重
やまさくらちるや小川乃水車　大津あま　智月
老僧も袈裟かつぎける花見かな　大坂　之道
浮母子花は摘取る嫁菜かな　祐甫
山桜小川飛こえおなごかな　越前　普全
昆布さしや花見手のつく庫裏坊主　利牛
おちつきを魚やすませや桜かり　仝

打あぐる桜てふくや庵所　孤屋
みな寺をあらふ日なくて花見かな　野坡
倉乃陰みなあつまるや山さくら　仝

上巳

常なれ川乃なかるゝ汐干かな　沾徳
貝ふかし花見るやみつの桃の花　桃隣
うつゝきの紙をいつれる木の雛　其角
鶏乃子れ餅をそゆるもひなゝかな　みの　如行
日半路をてられて来るや桃の花　野坡
麻の種毎年踏て桑の花　利牛
藪垣やこゝる乃魚かくす乃花　孤屋
青柳乃泥にしだるゝ汐干かな　芭蕉
鰕しられ。

散つれは命ありけむ小あゆ哉　サカ田 友右

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　芭蕉

若葉さるつゝしの葉や二ツ三ツ　子珊

ほそりくとこみ梲門のつゝし哉　膳所 怒誰

鳥乃行やけ乃ゝ隈や風乃末　樗雛

ゆきおもきさ菜の花乃麦乃嵐哉　仙華

旅行みしく

清水場煮焼より風をすゞされ哉　野坡

此集いまだ半なるに孤屋旅立

すゞりなる品川まてみ送りて

雲雀鳴こゝに其行もおもしろき　野坡

梅さくら婦き月をりの名残り　利牛

夏部之発句

首夏

塩うきと乃雪ほと見え衣かへ　嵐雪

衣かへ十日はやくも花けくり　野坡

旅をぬく旅ねかハせり衣更　九言

塩よりやほさぬ袷も衣かへ　雪芝

花のあとけさはよほどの茂り哉　子珊

麻屋の暖簾白し衣かへ　利牛

卯乃花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉

卯乃花乃絶間たゝかん闇の門　去来

旅行

う乃花に芦毛乃馬の夜明哉　許六
卯乃花に扣ありくやかつらの門　支考

凉しさ

棹の歌すゝしやうら涼しめしうち舟　洒堂
菜花紙池に蓮ある古居に　素堂
うきふしや竹の子藪に花を待　芭蕉

郭公

寐まくらを二階にねころふほとゝきす　桃隣
ほとゝきす一二の橋の夜明かな　其角
行燈と月まつ夜にせんほとゝきす　嵐雪
挑灯の空に詮なしほとゝきす　杉風
木かくれて茶摘も聞や郭公　芭蕉

青雲や舟あらしやる子規　素堂
時鳥晴りし風か雫たる　利牛
子規声の出きれぬ格子に　野坡

麦

棟ちかに麦穂いやしや紙どり　この 荊口
麦乃穂とたゝふたゝむや筑波山　千川
麦秋の田植や二生え蛍とぶ　許六

翁乃旅行を川さきまで送りて

刈こみし麦乃匂ひや宿の月　利牛

おなし時に

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡

おなしくころの紙

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角

さし鯖をくみてやはつかれ風の色　大坂 洒堂

五日のくゝみすみぬるあやめ哉　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みなとやら首の骨より甲あまき　仙花

帷子のまださぬき鯛る袷かな　素龍

夏籠

曲松をみゝのたて町のはつき哉　臥高

枯葉に昼臭あつし見れかな　斜嵐

二三歳鶉を鳴ともあつき哉　彦根 許六

さゝけ山の力及ばぬあつさ哉　猿雖

するがぢや花たちばなも茶の匂ひ　芭蕉

此句は嶋田より便り

五月雨

はらされやとおり〳〵人渡る丸木橋　素龍

五月雨のゆゑやおとし川大和川　桃隣

さみだれに小餅をあきらむ光哉　北枝

五月雨や畠の葉なかるゝ蕃藷(ヤヽコホウ)　嵐蘭

この句は桃隣よりおくりこしぬ

五月雨や龍もおつるはなのかな　岱水

涼

川中の根木によろふ小涼哉　芭蕉

月影まうこく夜寒や蒙の先す　可南

涼しさよ塘まゆきる竹の枝　外七

竹於を志つくろうするすゝこぶ　採芝

清風をすゝれて涼し五徳の於す　智月

すゝしさを志られし柄杓の雫かな　元峯

すゝしさや湖の上比ぶこと　玄来

夕立ち美あらふき石垣の折り　母坡

三ヶ月の陰うしてすゞむ気　素堂

題しらす

橋や京家机乃あるところ　杉風

昼さがりむしや破芭蕉すゝしき清水　正秀

世の中や通貴畠のぬけ出家　里東

早乙女のしのくちくるる苗取外　嵐雪

東西雑子く

山吹も巴も出る田植かな　許六

ひるがほや雷溶しぬ花の色　智月

夕立や人もすさめぬ生くるみ　小鯤

晴の日のとさかきせよ子すゞめの巣　乙州

雷雲の雨宿こゝのかりの宿か　丈艸

蛍みる夕やくらの雲　仙花

一いきれ蝶もうかつく我らかな　楚舟

ありかる蝉の声の雨　（ミの）残香

樗の花まもまなし休茶の手　（サカ）為有

團責な町乃あつさ哉　野風

けふとても八ッ橋も栖や雲の峯　旅甫

一枝をすけるまよ竹のわかれ哉　仙花

竹乃子や児の歯くきのうつくしき　嵐雪

さるへき人僕の酒をのむるとかく
戒めの為て說せしむ志られある舎に
それとなく知らしあらはさ紙の竹に
名あるかなりと見出しありしせられ
夕ぬれて汗をかきたく

汲く酒よ君乃つくあつさ哉　利牛

ある人の別業にいさなはれ出る時
て摘まりしを逢つてかのことをなつかしみ出て

竹雲をわけてみるや夜の発　丹坡

穐之部

名月

秋のあはれはかれこの中に有り
月を観て時代の本を見るとす

名月や見つめても名ぬ萩一よき　濁子

名月や探題まかせん秦の盧　去来

家買てことしも見る初の月夜哉　荷兮

名月や誰吹起す森の鳩　洒堂

松陰や生て取揚る江乃月見　里東

ゆらゆらの橋乃ひくさよ今宵月　利牛

家こほつ木たまも寒し後の月　其角

むさしの竹秋のころそこにあそひて見侍る

望峯ノ不盡雑波を

明月や不二見ゆるかとするか町　素堂

七夕

笹の葉に枕付てやほしむかへ　其角

星合をまえみえぬ孔やせやの縁　孤屋

七夕やふりかゝりうるあまの川　嵐雪

盂蘭盆

きりきりまはりかゝりや玉まつり　洒堂

踊るへきほとには酔て盆の月　李由

盆乃月ねたかと門をたゝきけり　野坡

朝顔

閉関

朝顔や昼は錠おろす門の垣　芭蕉

朝顔や日傭出て行跡乃垣　利合

てふ〳〵と蝶も花の柳哉　沾春

秋虫

手にとれは聲ハかりなるきり〴〵す　智月

悔りふ人のとききれやきり〴〵す　丈艸

蟷螂りん〳〵草さるぬるこれ哉　如有

こうろきや暮て退る椙の上　孤屋

雁

夜雁乃帰をつんとの霧に雁哉　車来

人のなくなりて

雁のふむ浪や硯の影頂　素龍

旅行のまゝに

退く路やすゝむ先に雁の声　土芳

草花

さが野の萩や夜より秋の花　桃隣

花すゝきさらしくちるや村すゝき　野童

行暮の荻や刈かん稲の端　猿雖

芦の穂や鳥揺る葉ごろ
　あまをはさみく　丈艸

芦の穂に音らしけるや宿の縄　去来

　山中の華精をみて
華精や鼻のさきなる時雨さ　其角

園菊

菊畑おしくあるゝ青れぬりの弐　杉風

摘菊も多すぎ出たる九日かな　桃隣

秋植物

梢のあるさまとゝこの紅葉ころ　利牛

蕎麦や谷まなくて蟹の甲　諸甫

秋風や茄子の穀のあはれなく　木白

箕手すく窓まやちて錦の枕　孤屋

ならはしの名を南蛮といふ一本の實ハ
それら浮世南をんまく ひさしうけし申へ申や
赤洋ありつき天のそきうへし又八宗り
あとよるかをのかさちをこのめる人て乃
りくあさひく行くさるあるへしこゝ
　やさし
こゝぬ名目八世うむるれ村の名てあれハ
天資自然の理さへりし懐むべくよれわ

壺をうくるや石臺にのせられたる竹縁
のかしのくさをある八上うれ仕合ともすれ八
すりもちのきれそこぬけ乃つるへ土うかれて
ま乃あられ二階のつま摘かしのひらけくを
よのめる亦とあやうくみを待る[illegible]の
そのおきなをひそ八されかくおりなさ大名と八
うて[illegible]つり鉢のまもふきやうしつれ
てりんや楠の日をうつしをみさるなとあり
是合者葉乃とききるとされ其されなれく八
花こ豆枝乃[illegible]紅葉ふ乃色をみせるを
景色の頂上とせりかくハ云へとある人
此[illegible]りうての論さりみち乃かとりの

小亭まよこる一ありて あんちうまさと
ひとつみのりしを[illegible]まさせしもかりと八
いやしめらる舎きみもおかしれまうし いまハその
人くも此世をさりつれそのよく[illegible]を
よのむへしれうしきかもみなもへしれと
小序をまうのよ

石臺を[illegible]すれ根こきや[illegible]まし　[illegible]坡
是しられ

一 和撲取ある姫や秋のしのき　岸雲
手風呂れ亦や葉[illegible]みすの陰　丈草
礒ひとりよき[illegible]拗の白ひゑ　洒堂
秋のくれいよくうくあるまつ　[illegible]

葎や荻蔓も咲ハ嬉し色　利合

夕皃の汁ハ秋しる水なれや　支考

くろ茄子も風さへうてもなかりけり　小枝

秋風に蓮やあふなき池の上　俗 信之

庵丁の行衛くらし月の雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落る風の音　桃隣

木枯の磯によせ来る入相かな　芭蕉

樫の木や荻ちるはなれにこぼる　支梁

蔭の葉のきれめの中や小松原　斜嶺

刈芦の乾の中のあるゝ雀かな　相実

凩に藪まとふよる小家かな　抄香

初冬や猫の毛も立寒き哉　楚舟

凩や鬚吹けき猫の面　八桑

初冬の山ふかう訪く

木枯に根まきつ付桂皮哉　桃隣

箒目にこぼれの蓑ちぎさ哉　游刀

時雨

芋畠の猿へらしけり初時雨　荊口

夜さり沖の時雨れけりところ　大中

芭蕉翁をとむらふの草庵にまゐりきて

ありしと空しき時雨すぎたるの庵　斜嶺

む明とみれえ成しし九重六　許六

鞋ぬのころ

小取荒とふみりの向を枕やころぬ　野坡

大根引といふことを

鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉

流きをとしれん所荒て大根引　野坡

神送荒るゝ宵の古大根　洒堂

はむさといふ下の五文字をすて

人声の夜半を過るさむさ哉　野坡

この比を生ん椿もはむさ哉　示蜂

蕎麦切に吸物もなきさむさ哉　利牛

是かともおもひて今宵の月の舟　我眉

奥店や莚うち上て冬乃月　里东

去の二日にふか川の庵をとはれ

他国よりの旅乃そらまておもひやりて

今宵も出し侍

雪

はつ雪ふとふりを熱ておねむり　野坡

初雪に犬かけるやの鼻ちゝら　利牛

はつ雪や塚の崩れの煤上　買山

雪の日は庵借(カサフ)を鷦鷯(ミソサヾイ)　依〻

雪乃日やうすやうかゝるつま櫛

冬の夜被不寺みく　猿雖

杉のうれに音絶て夜の鶏　支考
朱に染や碑のかたへの雲の鵆　小枝
まつ霜や生る尻から消て行　許六
嵐菊に横町さゝる霜の花　洞夕
海山の冬に降たる霜はれ　乙州
江の舟や曲突（ヘツツイ）に立る霜の鷺　素龍

鉢たゝき

茶しさむ鍋に打込枯葉かな　呂丸
こゝろ菊や杉糠のうる臼の端　芭蕉
禅門の草鞋ぬぐ十夜かな　許六
日やゝ暮る盆ねぶる村かな　智月
白魚のきらめき白ひや杉の箸　之道

榾の火やあかつき方の五六人　丈艸
庚申やこよひ火燵のわる咄　珍香
塒の縁をするべき神楽　其角
海へ降霰や雲に波の音　仝

すゝはき

煤はきは己が棚つる大工かな　芭蕉
煤掃せしもをくや我代の杖　万平
餅つきや元禄踊る破れ鍋　野坡

其場

頁外
句移ス
え出し

そうまきぬ年へもはや年の暮　李由

あしらせく鶯一羽としの暮　智月

縮みさのけむくしさよ年の暮　孤屋

としの雅も足らららく給くれ　猿雖

年の日れおふこさきき路ぬぬひ　丹波

芭蕉よりの文まてれの内

いかたもとなしとそのまま

丸みえく心やさしや年こもり　素龍

行年によへとまる栖かな　沙英

謡諧秋之部

秋乃雲尾上の形に離れけり　其角

おくれてく一羽海わたる鶴　孤屋

形高く日傭摺る貝吹くく　仝

月の隠るく江扉の門　其角

相文ろ手乃火桶も蔵さけり　仝

つもひ降んと丸きこるうれ　孤屋

一　下京を字治乃草歌さけれて　仝

二　坊主乃[illegible]蓑ハおこしむ　其角

是雅れ子もしそ居る八分り　孤屋

息吹くへも霍乱乃針　其角

田乃畔よ子苗把く投ても　孤屋

石青のそさむ編笠乃笠　其角

帆柱乃引出しさんざうさ踏　孤屋

郡に掛乞くうしてね乃舟　其角

鈴縄に雉乃さかれハひかれく　孤屋

眉れ下る御筏ぶらりゆし　其角

栗つく乃梅漆桂乃花ざかり　孤屋

むうしの子あり志のよせて出　其角

いさん浪ある金ばつらひ屋　仝

夏乃縮乃おとしき内　孤屋

夏草は刈てさされてやれけり　其角

あがとにへても小僧いやがる　孤屋

手の豆寝椎乃横も鉛ちりて　其角

常よき家ら風呂焚くの川　孤屋

君こねてこゝに涼舟乃起ぼうつ　其角

稗と嫁との行衛つる錢　孤屋

辛済へ雀のこゝる秋乃くれ　其角

小より冷気　月乃雲おき　孤屋

紙燭してよ霧て来より雨の残　其角

上塗あしもし浜で擲く望　孤屋

鳴子栗　濃起行言ても気有　其角

夕子も白つく浮葉乃うね　孤屋

孤屋旅ありの鉢事く涼への秋も出す

なかゞ未練の下で你了ね

其角　孤屋　各十六句

今秋

共人

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんどと水の落る秋風　野坡

入月に薄をしんのりと冴有く　利牛

縁の外まで桐乃ひろがり　桃隣

細工より茶をゆめるゝんでつる事　野坡

つよふ降る雨乃つひやむ　利牛

飛の先見えて不んぶぬよう扨　桃隣

近くに旅寝とも宿も立さきぬ　野坡

走りより立春と帝ねめきし　利牛

いつよりもさきい十月乃みそら　桃隣

壺乃古き縣きしきく　野坡

かよひつゝし嫁乃仕合　利牛

たんまりと雨さは降る子そろん　桃隣

誰折てうりけるに夕月　野坡

付てしなき佛きて円る盆の月　利牛

晦日まで急にさらくおとなし　桃隣

人の拙賀ぬる業多葉らし　野坡

もとや浮世も十のる角川　利牛

より平地楼のに補へとり留て　桃隣

むかひ乃きゝてとされもまんみれ　野坡

冨岡く萩くの身群さ中る　利牛

ゆるりしき遊さきつく　桃隣

此花の葉をきくし秋のる命　野坡

有心

杉の木末り内にうそくし　利牛
門しめて老の噺し乃おもたくて　桃隣
さゝおされく又薪部屋に待　野坡
よへやうれ家のよ上と並てゐる　利牛
きやうしんされてあまぬの關　桃隣
帷子も二肩よううらぬ暑さかて　野坡
京かと惣別家に念入　利牛
名
焼物に組合たる富田鮓　桃隣
深を盛んで食るも祢て白る　利牛
替盤た雪踏とする忍事にて　野坡
先沖まてハ見ゆる入舟　桃隣
内一らう草木の家して干物の絵　利牛

起情　拍子

ちりしきし風のおちぬるもみぢさき　野坡

神無月廿日ふか川にて即興

振売の雁あはれ也ゑびす講　芭蕉
降てハやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫乃小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物乃餅を絶さぬあきの風　野坡
割木乃安き国乃露霜　芭蕉
網乃者近づき舟に声かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきハ殊軍乃大事也　芭蕉

淡気の雪に雑談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹けして　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛
上をきの干葉刻むもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉
絹機の暮閙しう梭打て　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡

平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ悦(ヨロコブ)　野坡
どたくたと大晦日もしらぬ宿　孤屋
捨られて乙の状のなきさき　利牛
中よくて傍輩合の借りいらず　野坡
壁をたゝきて寝せぬ夕月　芭蕉
風やみて秋の鴎の尻さがり　利牛
雛の鳴子の綱をひかゆる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉

月見よりのつれの揃ちかく　野坡
こゝろもち茶乃三内中用ふ　孤屋
輪炭のちりをはらふ春風　利牛

芭蕉　野坡　孤屋
利牛　各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟濱に買て　芭蕉
おいくらすきらす大名の供　子珊
身はあるゝ風もふかし落月夜　桃隣
粟とられてひろき畠　利牛

鯰沿れ焼きれくる秋乃水　岱水
筋ろしらく経よみ素る　野坡
二三更立椽乃りし婆門の板　子珊
る乃巻抽のさハる二十日の　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夜は来て　石菊
稲よみ子みさ雨乃とろし　杉風
もおも割れ一人もみえぬ浦の秋　野坡
めっきり風のかかる宝の色　利合
貴し乃質とかふらて旅に出　依々
背中への弥る兜をかハゆる　桃隣
おさ山しられきぶく上よ落ちて　子珊
川うちさくよ小結いしする　石菊

其人
有心

名
外曇りたれくらき僧はさき飛子来る　杉風
出かへ臥れて也くりまち　岱水
母知のひゐ見て薪し親ゐり　孤屋
これ集免てハ神脇雑道白　為有
倦莱を掃く傍へそうり迎　桃隣
けさしけそく業代の花　依々
宮奉てかくバと自腸ときちらし　沾圃
とうりくりく犬とらりてまる　子珊
又けさも御の会く塔を唄　利牛
損てうりして質へこがれく　杉風
大根れへはすれる毛の月　利合
酒をこすれて社舞の宮よ入　野坡

すまぬる流前の宿の音けうり　子珊
吹れかれ欲ゐてつるむせる声　利牛
銘乗るうしみく疲れハ掛子除れ　為有
七ツのうぬふかち飛呼ぶ啼れ　杉風
京の白あうそふ中よ除幽しく　桃隣
男まじりふ蓮そろゆる　岱水

杉風 五　野坡 三　孤屋 二
沾圃 二　芭蕉 一　石菊 二
子珊 五　利合 二　桃鄰 四
依々 二　利牛 三　為有 二
岱水 三

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をあら野と
いふ何故に此名有事をしらす予はるかに
おもひやるにひとゝせ此郷に旅寝せしおり〳〵の云捨
あつめて冬の日といふ其日かけ相続て春の日また
世にかゝやかすけにや衣更着やよひの空のけしき
柳桜の錦を争ひてふ鳥のをのかさま〳〵なる風情
につきていさゝか実をそこなふものもあれはにや
いとゆふのいとかすかなる心のはしの有かなきかに
たとりて姫ゆりのなにゝもつかす雲雀の大空に
はなれて無景のきはまりなき道芝のみちしるへせむと此
野の原の野守とはなれるへらし

元禄二年弥生　芭蕉桃青

花三十句

よしのにて

これは〳〵とはかり花の吉野山　貞室

家よしといはるゝ花のあるしかな　路通

花白雲をかけたるやうにかれの林かな　信徳

なかなかに山とことしは人てあらむ　景風

暮淋し花の後の鬼瓦　友五

山里は飯よのさかる花見かな　尚白

何となく花見る人の長か　去来

みよし乃の雲ともいはゞ花も降しや　野水

手をかけて折らで過ぎ行く花の蔭かな　亀洞

下ぶしに寝られん花の岩　越人

花の山常にもちなる杖もなし　一井

見あかりしてあかりぬ花の隈　傍似

見ずの人はいつの花の暮　風泻

あの花を酒盛人として　舟泉

冷汁はひやしもやせむ花の陰　胡及

さつ霧に傘をつぼめてまし　長虹

紫丹の花咲たらば一ト月の雨　卜枝

おもしろさあまりて近き花の枝　蕗歩

連だつや従者におしき花の雨　荷兮

疱瘡の跡まださへ見ゆる若さかな　傘下

あらしとも風車売花の時　為芝

花見るきては人の声ある山ふ　さつ

山あらしの花を夕べに見はらしき　心苗

おりしもや野篭に詰めし花の雲　越人

なにとなく一つ見知る花ゆきすぎ　挙和

独来て友選びけり花やま　冬松

花ありとこゝろ昔見る尾上哉　冬文

首好して花はなきみよ蝶しき　荷兮

酒のみゐたる人の絵に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

ある人の出ゐるやうにして

櫨の木にもれるやさいぬすゝしく　全

杜宇二十句

ほとゝきすと鶴とへのゝ来りて驚かす
名も庵北夏国見つらん郭公　季吟
目にはあをは山ほとゝきす初かつを　素堂
ほとゝきす井まゝにまくり蜀魄　沾電
蝙蝠乃ひろきふしやほとゝきす　越人
おもしろのはもるゝ。ともや時鳥　津山　松下
沼や先森のつく舟鳥の郭公　重五
ほとゝきすしれるさむ舟の廣さき　柳風
あら冬のかくて寝百ともしみそれて
ほとゝきすしらぬふき鳥うれ　嵐淳

眩ちき殿室のやかしくきれ　旅桔
蜂屋臭き絡覚えるや時鳥　一髪
三声かしく聞のわくしや郭公　同
深みて
ほとゝきす十日もはやき耳寿哉　風泉
蝶しきや森つゝぬ生のほとゝきす　杏雨
あ家しや今鶏きく郭公　傘下
ゆくかまやかうゆしきかしみれ　同
るゝとゞるともきあかるい郭公　琥可
松もありけの肉を猿れるとゝ吟られかし　大津
かさんふみれ人の郭公　智月
ふつゝかしうつゝきかけり郭公　李桃

しつかさに実のなき布なきれ　百山

月 三十句

かるくしと笹のうへ行月夜かな　梅古
それかしも月見る中の猫かな　瑞水
月ひとつをひとりかちの今宵かな　一呂
西乃月とりてもふし比叡わかり　越人
年とるや少し眠むく月夜かな　昌碧
盃や森の雲月やさか中の乳　津島 市柳
村しくれ来て流る月夜かな　一髪
とこまでもつくる線を月の光かな　長江
涼まんと硯抱く月見かな　任他
一つ蚊やいふほと見るひの月　亀洞

名月ハ雲消るきはゝかなかりけり　越人
名月やよしよし十六夜あとのつき　文鱗
名月やそろひ浮きて浮ぶく舟　昌碧
めいげつやそらをてわたる水の中　傘下
名月や鼓乃おとし太乃こゑ　二水
見るものと見えて人の月見かな　世五
名月乃ぬいとくさかけ
むつかしと月を見る目も火も嫌し　荷兮
いつの月も語りて高ふく名もし　仝
名月や海も松の風山もかれ　去来
名月や下戸と上戸のむつましき　胡及
めいげつはあかぬきもあかぬ林かな　鴻雪

宵の口しぼらさむしや月の影　一髪

十三夜

影ぬけて来ぬ程つたる月夜かな　杉風

朔日

昔いふ月の影もなし海の果　芦丁

二日

見る人もたしなき月の夕べ哉　仝

三日

何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

夕月夜あんどんなしで書きもせむ　卜枝

五日

何日見さへ宵の月夜　伊勢　一泉

六日

銀川見習ふ比や月はしら　美濃　露芦

七日

絶々に雲しみて晴る月夜かな　岐阜　一髪

雪二十句

大津にて

暮の日や船にのよく越乃色　其角

いさゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹乃雪落て夜るなく寒かな　塵交

かきなるや岩わる山只乃山　京　加生

車屋…みるや…おしきかな　加賀　小春

くつきとつんでくる鮭を洗ひけり　越人

はつ雪れ戸に啄ぬ鳥をかれ菴かな　尭幸

ものゝけの姉も妹も雪れ一ツかな　松若

ふゝきおりて揺する鐘の音の壊　二水

雪後に一る座をたつる雀が枝　竜仙

秋の雪ちるとまるやうに枝折人　（夜白亭）除風

中々に見る月や川筋斗まるとなしと　雪門

梅が香やかしこまる手乃清濃く　傘下

雪乃江の大舟よりは小舟この枝　芳川

雪乃影が鮭をとる声なし　冬文

雪の音松にやはしや雁の竜　桂夕

ありしや浅香がりの酒強飯　若兮

ちりぐや先草履出懐まで　路通

はるゝ灘し白れ見舞ありかな　洲水

舟うけていくつか姉が海の宮　芳川

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉

あれ人の手からはなかりし花の春　叙　古梵

ゆふかすや元千年乃つゝく縄　風絵彰

松かざり伊勢が家買人ぞ誰　其角

うたゝ百連歌にあけし鳥の春　文鱗

有明の女郎衆に去りし門の松　去来

かざりなおして年ふる柏かな　一晶

元朝や何となふれし進される　路通

元日ハ鳴すゆしさるかおそこ介　一笑

藩園の梅の花さむ白氏哉　大坂 如行

蝶の川社老ゆきも花よしの春　岐阜 蘆梧

若水をもうちうけて見よ春の梅　亀洞

伊勢浦や清水け結むそ鶴奥　同

まふ紅れ若をつくて見む白氏梅　昌碧

去年の実ちいさうなしか若汲　元廣

小桶子雪やひろをむすつのかと　舟泉

としゝ男子社楽をむかひ祝り　同

山味ようら白まし吉竈の春　重五

松ふるし引馬停なし年おしそ　鶉雪

肩衣乃袖を琵琶の春よりうの春　仝

連くきて石は徳ゆりり万業来　一井

うら白もそうちる葎の葛屋哉　胡及

えれわえむこや新玉の年の海　長虹

を紀と紀て縄婦しおしく柳哉　風弾

さや那やふういれ面をいなし舞　同

蓬莱や舟の道のつんおくそて　湍水

佛よりも神をたふしと紀ら歳の奥　京 と地

のかえやとしの貝ていつあらん　朴什

なきらにとたかとひゐれたつし哉　冬文

正月の魚のうしら中炭さかし　傘下

久さ也ま寂しうさ後閑この那　冬松

あひくま松なき門も祈りしろや　柳風

大服ハ去年のまゝ家の白ひ哉　防川
さゞれ数字まつれ年始とこ　大山 昌猪
傘ニ歯朶かゝりて恵方棚　夕[illegible]
袖すりて松の葉ちきるゝ鶴の春　梅舌
寄てかんむ霰やうつる大かゝみ　飛水
曙と子の初やたちふくら　仝
若つ子れめてられ若も買魚つく　越人
初亥や演谷の橋のそれさ波　[illegible]
志川や志ほ清階ニきふの表隠　旧
月葉乃やうと隣ニ明ニ冬色　旧
こゝのとしやむりのまれ松ほつ家　[illegible]
面と子見かられえる末川毛かな　信 般齋

[illegible]ある武乃着ずも来るや子の日の子　貞室

初子

若菜つむ泪を鳴を刻畑かな　越人
精出して摘むる乃ぬ若菜かな　耿石
七草を七ちうしさゝて泣子かな　津島 俊似
女出ゝ露さ川なとの若菜かな　加賀 小春
例添く杖の枕きさ薺葉かな　落誰
吾らりものこしてぞかぬ若菜かな　岐阜 素秋
不図くつかえる梅折しりも　玄嵒
旅る手く折ふりよし梅乃跡　路歩
むかへのむらものぬるへいゝかいしき哉　越人
蔵の見えすれもとりて折られ梅の香　辰梧

梅折てあたりに見ゆる那千代　一髪

鶯もおとさぬ声のすゝはきに　冬松

みのむしと思はれぬ梅のさかり哉　雪堂

網代民部の息子に逢て

梅の木に猶やどり木や梅の花　芭蕉

うくひすの鳴くところなる山風の那　若風

鶯の啼や鍋つる行手水鉢　李林

あたゝかや鶯ないてあるそむ白銀　傍相

鶯はちいさき声も捨られし　一笑

うぐひすや声を眼にある頭巾かな　巾柳

鶯やおのしこもなきや初夜坐　英々

うくひすも波之浮を行く夜かな　梅古

はるさめやきしを越しぬる壁ふ那　北水

行く袴乃ぬくまる羽ふ那　塵文

行人の蓑をはなれぬ柳かな　冬文

かれ芝やまだかげろふの一二寸　芭蕉

うち晴て馬の眼乃つよさかな　傘下

水仙乃ちるところとまるよ陽炎かな　阪通

嬉しさを待るはしきものゝ枝　荷兮

當座

さし木

つき立てしるしのなきをさし木哉　舟泉

接木

つまのしたくしてうつる接穂かな　傘下

暁乃鶏にあかるゝほとゝきす哉　旅今

同

藪深く蕨のつくぬつくし哉　卜枝

春雨

ふる雨をいとはぬ人のことしかな　端水

同

春の雨骨もとけてことし　雨郎

合尾鶯

うぐひすの声つきそこなふ白尾哉　狀雨

鶯や井に来る雨のかげに寒し　古生

立印わか草つくる明座哉　士東 亀助

すこしと親子摘み捨てくし　京泉

すゝしくもつはやつまはやむ草　其角

すゝしと葉出すの花見たり土筆　荘翁

土筆やてらへつくつくし　指車

川舟やのてうちかくし　冬文

はくらし路中に歩行る土筆　喜江

葉真池の上池に鶴を愛せし　翁

池に鶴なし柳を書き柳哉　素堂

風の吹まゝに柳か那　冊水

何事も那しても柳哉　越人

さし柳ても花の夜かくし　一笑

天とゝりやゝぬる柳哉　小春

すまれて柳ハ風にやつるむ　一笑

ゆるつなく筏とゞむるやなぎかな　昌碧
さそはれて髪の中のまぬ柳かな　杏雨
うしろくて垣のつらく柳かな　此橋
吹風に牛のつらさむく柳かな　杏雨
吹風に蓬をとゞむるやなぎかな　松芳
うちふゝぬ日もゆるやかの柳かな　校遊
いそうしき世渡る柳かな　蔵亭
蝙蝠に見るゝ月の柳かな　円
青柳にみえし酒売車かな　素秋
川いきゝ湊にかふ柳かな　酔母
蕪に[illegible]植るなり　生林

仲春

麦の葉に菜の花ちるや畠かな　不海
菜の花や杉菜乃去年の哀かな　七紅
なの花の花の盛りにつるゝ日影かな　傘下
なの花の畦から花のちらぬかな　清明
うごくとも見えて畑の菫かな　玄来
万葉を仕舞ふてる真田かな　昌總
つゝきなて折りそらてさくらかな　越人
広庭に一本植しさくらかな　笑艸
とうさし八重ひらき咲きまさり　除風
まれとく仏を折れし桜かな　一橋
うしろより見えぬ池の桜かな　冬松
まちくしと山やくれゆく遠さかな　一髪

そよ風よちらくゝふるや早苗に　— 野水

わふのさらに擦くさむ野道の早苗に　— 除風

蚊帳まつりをかゝげる雛子かれ　— 一雪

?うち輪縄解てやる雛子かな　— 塩車

手をついて奇やおくれ蛙かれ　— （山崎）宗瑞

鳴てゝいまおはしやぬかへつかな　— 落梧

おそつむをむつましさうに鳴蛙　— 越人

いくすべも胃おる岸のかへるかな　— 去来

飛込てゑはしれゆくかへるかな　— 落梧

不図と飛て汲ま居ふせる蛙かな　— （膳所）雲下

呼ふやとの唐網よかゝるかへるかな　— 一井

?つ蝶を見の足おれ先かな　— 柳風

桜桐の葉にとまりて居る胡蝶かな　— 梅餌

花やかゝる中をわけぬるてふかな　— 炊玉

かれ芝や花ふきつれて行胡蝶　— 百朶

菫菜

何の気もつかぬ去るの菫かな　— 忠知

ねすごしと馬に喰ふれぬ菫艸　— 荷兮

おそろくの土と落るを菫かな　— 野水

置き日のさく洞の菫かな　— 舟泉

草刈に菫選出る童かな　— 路歩

行蝶のとまりを残さぬあさゝかな　— 燭遊

麦畑の人見るまる塘哉　— 杜国

そゝけ山や鉄の内のすゝゝ?　— （大垣）式之

ほろ／＼と山吹ちるか滝の音　芭蕉
松明に山吹うれし夜の色　野水
山吹とてふのまぎれぬあらしかな　卜枝
一さかり山吹のそくゆふべかな　岐阜 襟宮
とりはなく山吹のそくいとゞかな　同 蓬雨
わすれふともゆくとも去らぬ燕かな　去来
去年の巣の土ぬり直す燕かな　俊似
いそがしきとはいそぬなりの燕かな　長之
燕の巣を取はまく見るかな　長虹
[illegible]にゐてさゝれるつる地かな　嵐蟬
交減く鳴るかいなや萩乃露　旦藁
角前くやにくも見ゆる小麻哉　蕉笠

あさ清し新よし浦乃汐干かな　越人
わらべも日し飲すや桃の酒　傘下
人寂むと雨と陸との汐干かな　三輪 友全
山中は花咲かぬる躑躅かな　荷兮
樹ちやおりくて去りき花の名かな　兼正
舞ゆふ花のまてけぬ桃舟かな　亀洞
永き日や幢実路もくれぬなく　卜枝
永き日や油さしの木のよるる音　野水
折まめのおく垣らしを残しけり　同

初夏

こころもかくや白きをかきあはせつれ　路通
更衣襟もおりすやたゞくさみ　傘下

ころもかへ刀もさして見たけれは　嵐弾

旹柏老人のかちなきむしあかし山とはふ
香をたてゝのこゝろむけに文鞭かくれたる
ちて家の舟越人かもちあるを忘れ
かく嘲るわかなの此文鰆まやつり移る

野に焼く香もあるへし衣更　荷兮
山路かな

なつ来てもたゝ一ッ葉の一ッ葉哉　芭蕉

いちはつを折てたのむ人さきれぬさ　一井

椋花木乃いらゝ見てゐる若葉哉　越人

切かふの竹の葉にとられて櫓哉　章 不交

若葉ゝのかまくらになかえ此名木哉　日 落蘿

わけもなくその木しの日の露に哉　亀洞

めつらしと見ゆるに太ゝる姥棄に　竹洞

ゆふひしてゆふの見えぬゆふへ哉　鈍可

たけのこや下ゆく水の沢卯木　落ゝ

上下に京の経とて麦一穂　玄察

枯かねて夜もなりる甘夏に　生林

妻かりて京の木もろり晴れり　舩紫

むきかゝふ夫かなて里乃葵哉　鈍可

苔ゝ菰のよそかなや腺の竈哉　嵐葉

雨のなくおふのなさけしゝの一字哉　落梧

けし散る実を見るけ哉　岐阜 李挑

大粒な雨はこぼらず芥子の花　東巡

菊さかりに四つを拾ふぬ茶子は花　吉次

深川乃庵にて

庵乃主も兄くしらくありぬすゝきで　嵐雪

さひしさ乃りはしたれ見えし出る　野水

仲夏

宵の間を籬よりこゝる螢哉　採井　元輔

刈草乃つる屋に光る流るゝ哉　一髪

窓くらき簾乃そのほる螢哉　不交

園花よりつくしき人峠暈りかな　風留

夜細く逃されぬ沢の螢かな　吉江

あ先の枝を下たる上の螢かな　倉咕

くさりれ袖よりも出る神の祭かな　卜枝

五月雨へ流るゝ袖乃ほころび哉　鵲歩

あし先で蓑笠ふるつ秋りは此

ころもしのそくおもあの彩鵯哉　秋芳

坂乃むれく梅の一木の曇りかり　小春

かやりかにて稀にせ南くありまくかり　杏雨

高此く紙傘乃くろもれ鳴蚊哉　二水

蚊乃渡まく鑵のくまともりかり　一笑

藻の花をつはぐる延玄乃螢かな　胡及

汐引く藻の先ち見に若菜かな　児竹

足伸へく姫百合草折られ画像かな　此橋

竹乃子ふれ焼さけくなくなのほり　長虹

筆此所まで志るし事の竹　去来

関守もとくてもなき水鶏かな　丹野

あさ〳〵夕に柳きはまる汀かな　大津　一泉

この比は小粽よありぬる月夜　尚白

舟〳〵夕は傘にまかきを見るか　亀洞

岐阜にて

おもしろうさうしさはくる鵜縄哉　貞室

おなしところにて

おもしろうてやかてかなしき鵜舟哉　芭蕉

おなしく

鵜のつらに篝こほれて憐し　荷兮

は

声あらは鮎も鳴らん鵜飼舟　越人

先かゝる影もかまはぬ鵜舟かな　大津　淳児

曲江に舞の手そろへぬらしかねかな　柳舗

鴨の巣の見えたりあるはかくれたり　路通

松笠の緑を見てゐる夜舟哉　卜枝

虹の根をかくれ舟中の標かな　純可

蘭の香や淡ともろしや宵の雨　仝

撰けや蒔絵書人をうらやまん　越人

咲しや折のゝ夜のあさ　落梧

夏の夜や根やさゝ木ふ若簾の里　且藁

菴の留守に

すひつくへきそこれに夜の炭俵　其角

夕かほや秋はいろ〳〵の瓢かな　芭蕉

ゆふべの志るむハ人乃志らぬ也　冊水
夕皃ハ烟の鳴あとのくらさ哉　似宮
山路来て夕皃只ゝ家の名か哉　津島 市柳
名ハ無ら海夕皃に似てゐるも　長虹

暮夏

楠も動くやうし蝉乃声　昌碧
木ゝの露残りけふたちむら雨なり　冊水
夕ぐれに干す傘ぬらす垣根哉　傘下
哀しさに桜もやらぬ紅葉哉　玄蔀
涼しさよ白雨なりし入日影　玄来
簾しく涼しや宿乃かゝり口　蔗亭
まさき庵此夕あつしぬ墨哉　门

おもかげの人に逢ひけりゆふすゞみ　今治 如鳳
飛石乃露移ず草乃下涼みせゝ　津島 俊似
涼しさや楼乃下ゆく舟乃音　仝
桃灯乃ともしてゆかし涼み舟　卜枝
まくしさをすまれかゝる川辺哉　赤亭
咲ちらぬ葉乃こゝろの蓮かな　岐阜 秀正
蓮見むと日にさうやきにわくしも　松坂 晨風
咲きさく家ゝに蓮の手を　古梵
河骨にあり乃かれもなかりけり　芙水
まちくし志らぬ松乃古ぬ哉　長虹
すゞきつく汐干乃沖乃清水哉　俊似
連ありさ待せて待に志ら哉　文瀾

引さるく馬のすれ行しぐれ哉　涼月

かゝらぬを汲暮て行かしら哉　尚白

虫籠をとぬれぬ結ひあまりけり　一髪

蚊やりしや暮を咲えて桜花　卜枝

麻の葉のこほれかゝるの路　岐阜 李晨

弱法師早い後に付る名なるらし　越人

綿乃花さくもし葉に似たるかな　素堂

初秋

ちうしゑや麻かるあとの秋の風　越人

桃の葉や出る川ふくん膝の風　圓解

雲鳥雲居のちるかな

一葉散まるうしゆきさもりし　仙化

うらひつのちる形や秋の初しき　伊勢 方生

男くさき羽織を星の手向哉　杏雨

朝貌は酒盛しらぬさかりかな　芭蕉

蕣や垣のまし乃あしらゐき　文鱗

あさかほの白きハ家も見えぬ也　荷兮

子を守りけるよりの我乃白きにあきて

朝顔とその子のやうにすれかの　冂

蓮葉あさく後行ふうつかの　路歩

あさかほやひくくこの水に残る月　胡及

葦かりやかゝるや家のる　嵐弾

秋風やきさらに孫乃ん　去来

涼しさに煙を家より海鱸うか　昌長

畦の小萩飛こゆるいなごかな　路通

まつむしハ通る跡より鳴とまりけり　一髪

きりぎりす燈甚涼く鳴夜かな　素秋

あの雲ハ稲つまを待たよりかな　芭蕉

いなつまやきのふハ東けふハ西　其角

ふかれてもおきあかりつるや萩の花　舟泉

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉

棚作りをしらぬさびしき葡萄かな　作者不知

艸むらやしかしぬも萩に飛かな　伏見 任口

ことゝきれて燭をかゝ落穂かな　荷兮

行人も拾よとおもふかも落穂　胡及

宗祇法師のことをおもひて

淋しさぬ小草花咲野菊かな　素堂

ましし乃姉ゝ根よるさもなきかな　俊似

仲秋

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

つくづくと絵をみる秋の扇かな　賀 小春

谷川や茶筅そゝく秋の旅　洒落 益音

石切の音も吹りけり秋かれ　傘下

斧の柄や蝙蝠出る秋の暮　卜枝

麻のまる人の魚とる夕べかな　一髪

田と畑を持つまんなかの業かな　一泉

山縁の麻路絶まく糸なり　全又

紅葉わかたつ竹への滝の間　其角

しらぬ人と物いひて見る紅葉かな　東順
萩の手に紅葉ふらしつきさる枝か　林斧
まくしなく地にもみゆるの虫の声　越水
山の宿をとりて秋の夕かな　宗和
ワの草茎よりのかれし
聊せん秋の夕べかかり　加賀 小枝
暮暮へ中つゝく
寺乃実のぬけつくしたる蓮のそ　越人
一本の芦の穂痩しぬせきさか　防川
松の本に吹かくられて秋乃蝶　舟泉
まつしてわかれ蝉のもぬけかな　胡及
何事もかくらぬ芦乃きれかな　暁鶴

関乃茶屋にありて
さそ旅猿にやしきさしは蘭哉　其角
よそのみて
きぬさしらてみゆるさ出よ帰るさま　芭蕉
いとかしや我かの宅乃衣造星　加賀 一笑

暮秋

あふなく枯し草の白さ哉　巴丈
しら菊のちらしあそおのわしき　昌碧
山路のきく我菊とも又ちらひけり　越人
一りのや佛しぬ菊れ花さかり　暁鶴
春宿の宿に旅ねまるおい草物にせ
とて蕭けたる出暮秋かれかく

かくしけのうきをみせてや菊の花　其角
菊みつゝ溜る人や綿帽子　同
りうようをうつて菊作ふとおりむくり　二水
かゐふりし若葉へ宗祇の燈火哉　伊勢 千閣
淋しさに樫の実落る寝覚哉　濃州 芦夕
おる音もめうしんちれや梅もどき　加生
芦乃穂や○まねく哀れもちるわかれ　路通

初冬

あちつらの乃むしりとゆる時雨哉　湖春
京なる人にまつらし候
一樹わく三井寺さへ神時雨　尚白
こうふれ旅行の出れこ乃夕　湍水

万句興行は

見しり逢人の中よるれ時雨哉　荷兮
人を待ちかる日まで
そ彩き樫きらうり見るしくれ哉　落梧
鴻乃子乃首縮のこくれ志くれかれ　放亞
淡しき寺もうり蓑着るしくれ哉　傘下
こかくししふ六る乃内乃姉さちるゝ　荷兮
一葉ふく桐の葉ふミ谷によりり　一髪
このかく淋しき囲爐裏哉　同
枇杷の花人のはとろく寺院のかれ　同
茶乃花やこのつめてるつんくる哉　李晨
霜夜の花志くれよめれて野淋し　野水

葉乃虫乃いつくらつれてや帰り花　昌碧

麦まきく寺磯庵ふなりし庵かな　仝

乃らくしや麦まく跡乃石のうへ　一井

淀のゝとさしみくある大根かな　落梧

石臼乃破れくおしやつるの花　胡及

まくしもとくさハ冬のみ抱かな　文鱗

あらし紀路瓶よりる蕪うれ　卜枝

みを結る風の徳ともなき枇杷の花　泗雲

蓮池のこのらハ又見る枯葉かな　一髪

露る乃かく石きつもはくかれし枇杷かな　桜芳

こかししる砂くしる庭の中　杏雨

霜る枯の海まひきゝる葉この花　蕉堂

冬月

焼を出ゝ衣くし月に面あき　北五

あさ漬の大根洗ふ月夜かな　俊似

仲冬

枯らしふく清きつゐる藪かな　淡路 猪吉

吉し浪して見にくたちしぬ藪かな　同 室治

揺よするつる蕪にまかしぬ藪かな　林寄

笹の戸をはしくろるやむあわれかな　李雨

いつしりる蛍を押しよせはおしきかな　宗之

家の紅せんさんの実のこぼれけり　杜國

あら柏乃葉末の露にやつれたる氷かな　猪吉

沢き池氷のよにれ破きけり　俊似

つきりてまろ菜うきなり落水　除風
寺はなれて何そみしらぬ氷柱哉　衆吾

兼題ニ寄舟

暁より寄舟家とろも冬かな　嵐蟬
ぬつくりと寄舟まま寄るれくさ哉　荷兮
ゆきとこ冬く寄舟まま寄るら冬の哉　長虹
ふる雨より寄舟川出ん鶴かな　一井
寄舟引や俳諧なる三ておる　亀洞
つくりくて杉なりて寄舟乃を絶哉　含呫
まさ添や羽白つ思鴨京かしら　白炭 忠知
ふゆかく幸の蓑くふる衛乃哉　亀洞
船解を見えさもおもん夜千鳥　村俊

井をほるもの六月のごとく
茶汲く男ハ冬も裸なり

汗出して谷に突こむ氷室かな　冬松
海氣揚乃壷埋あるさき氷室かな　利重
炭竈乃穴ふさくや落葉けり　亀洞
膝節を律く老ても出るさむさかな　塩車
火とほして幾日になりぬ冬椿　かゞ 一笑
いつとなし庇起せは冬のさき　亀洞
冬籠りまたよりそはん此はしら　芭蕉

歳暮

餅つきや門にわすれし酒くらひ　李下
五十年よしもえぬ拙なり年の暮　尚白

かれ花の後まてすゝてちり残し　挑孔

ちる迹く楷つくゆる葉細に　亀洞

煤はらひ椽よさけゝる瓢つね　一髪

あるゝの月ミてゐる人乃ミやけよ

よて柿乃実出つゝ行る年

の葉をうしなひかさりをせんとて　荷兮

としのくれ柿の実一つころくと

門松をうつくしく　蛤一荷のひ　内習

田畑よ氣遣ひよのこさきに　亀洞

雑

年中行事内十二句

供屠蘇白散

いはけなやとそなめ初る人の爪　荷兮

奏白馬

こしもとも指乃色の徒なし

石清水臨時祭

沓音もしつかなさかさのに

灌佛

うかみ乃身やつむてよ洗ふ佛達

端午

朽も瘦く菱付て阿髪萬し

施米

うち明くかくれ菜て虫臭き

乞巧奠

ワつ葉よりも七夕にまゐらせ見んとまき

駒迎

爪袋も旅乃すりこそうらむらん

撰虫

草の葉にや見乃あはれさるきりぎりす

十月更衣

更しきも衣の今よりも色乃花

五節

舞姫に袖ふる姿を打ちふり

追儺

打ちはれても朧よそつるく鬼の面

詩題十六句

野水

今日不知誰計会春風春水一時来

ゆかりし梁のほとりさへ春めく水の風

白片落梅浮澗水

ちる梅乃うかれて行や梅白し

春来無伴閑遊少

花貴々に落るはの中より譲れ

花下忘帰因美景

深入やくるの上きぎよ花の下

留春春不留春帰人寂寞

打まもこころくるはる乃飛ぶ風

巌風吹袂衣不寒浸不熟

綿脱と松乃緑やまさりけり

池晩蓮葉謝

蓮乃香もひろき池のうきは哉

暑月貪家何処有 客来唯傍北窓風

涼しさとて切ぬまゝなりし北乃まど

大底四時心總苦 就中斷腸是秋天

君の旅もまてゝくれなし秋乃空

李風自後秋氣颯然新

秋乃雨もれく風ふく大なし

遅々鐘漏初長夜 耿々星河欲曙天

花と夫らひさかゝるあつて夜もきき

残影燈閑墻 斜光月穿牖

稲乃葉や浮たる白玉の月

万物秋霜能壊色

白菊や霜にもまけぬ秋乃花

十月江南天氣好 可憐冬景似春花

こがらしも吹つくして息つく小春かな

寂寞深村夜 殘雁雪中聞

行かたもしらぬかりやきのこゑ

白頭相對佛名經

佛名乃折る腰懐く白髪の哉

禅閤乃擬ひのとし浮りしは

さきそれ折りしくて

かゞみよる月も見るきつかな

舟泉

付木突
めくる園の露ても恥し人乃家

釣瓶縄引
かへるさや酒のまゝよふ秋の里

糊賣
あさ露乃きれをひらぬるつくもなき

馬糞換
こかしし乃松たんぽゝさとつもるて

李夫人
魂在何許香煙引到焚處
越人
かけうつ乃抱つきしつゝこゝろもゝ

楊貴妃
雲髻半偏新睡覚花冠不整下堂来
なら風よ常やゆさゝる痿魚の那

昭陽人
小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長

外人不見々應笑
ものすきやむかしの姿乃儘ならん

西施
宮中拾得娥眉斧不献吾君是愛君
花笑しも植くらし牡丹の那

王昭君
玉貌風沙勝畫圖
しられぬもまたしられぬ色乃柳かな

一日ゐるゝとらくらの結うく
酒君

卯
痿やの坂や沽鄕衒嫁水出く?

辰
杜若生ん待書乃まゐる日かな

巳
溝萩乃眠りつゝ扇子の那

午　水のかよふ草ゟ上を踏れしも

未　蝶乃まふ武家乃夕食るまゝなり

申　三月色や鶏しらるゝ〇桃なり

而よあきて生と為りの鳥の桃源し

山獣　鹿笛乃上手をとつみれあされさよ　樹水

飛鳥　鴫寒乃ゆ彩長さ日おし弐　児行

里虫　枝吊る虫くりよゆ蜀漆こゝ祝　含咕

海魚　村しるよ鰯川りり盆乃肴　仝

川魚　秋乃暮鶺川しくの丈ぬり弐　含咕

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是謂人

一分ミ棹さく　桃乃滝ホうれ　越人

蔵舟於壑蔵山於澤謂之固矣而

夜半有々力者負之而走

かくしてかへらぬ師走乃市なるゝさゝれ

縁聖棄知大盗乃止

七夕を捕らすてゝもひなきむらし

鋭者夭

散とこそ法なきものハ花火なれ　桂夕

鈍者寿

鶏頭の高よ　かゝるも紅の那　市山

薦房

ほくきれ畑のむ時をまつりかり

師走　一井

うつくしく人はみゆるし荊かな　長虹

一休

ゆかしくの霞たはしや月の雲　湍水

法然

時鳥乃法くろひもなむあみうつゝ哉　嵐深

山岩

松く山を霧に減るか岩乃角　湍水

海岩

苔むさし浪かと出もあらなり　仝

名所

八年ふすま奥をつゝむや能田かな　杜国

しく奥乃背や武かる大江山　荷兮

からさき乃松ハ花より朧にて　芭蕉

葉一把うちてあはなる阿波手かな　湍水

浪路海くるゝうかれぬあやまぬ岩堂　荷兮

琵琶橋眺望

白かすむ君か嶽さしむさき浪も哉　含咕

園ちらぬくいまつも花しらぬさきかな

笈法國閑しく宗乃山ちまに花の

ほうろをつくく咲しおよしや　宗祇法師

昔女出く布子着たれし立ち衣　杜国

妻うつや内帋もあつき志賀の里　亡又

さみたれにかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖乃水まさりけり五月雨　去来

旅

牛もなし馬相乃わさりのみ月夜　一髪

角田川にて

いざのぼれ嵯峨乃鮎食ひに都鳥　貞室

みやこしのをいふ秋之見乃音　破笠

いざよひもまださらしなの郡かな　芭蕉

夕月や杖まみなぞなる角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらばけふの月もみよ　素堂

鳴く虫乃てるやまも名残る羽田かな　胡及

鳴く実もち萱津乃あるのむまこかな　瀏支

武蔵野やいく夜もみる時る　毎泉

湖と白根のつゞき村しぐれ　尚白

かし崎やよそよりあかく沙明なし　伊勢　浪友

むさし野と行めても見る乃日あしかな　洗悪

絶つくしゝと生海気を焼やふの奥　俊似

垂されの桔槹轆轤やとのたく　津島　一笑

宮乃富士芒やそれよりかくれけり　濡水

よし野山も峰も夫々宮乃夕への鐘　那水

早稲乃やゝとつんぐしや鳴なる　芭蕉

恋る乃鳥や石彼の山家の蝶柿　如行

旅

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

大和国平尾村にて

花乃陰謡に似たる旅ねかな　仝

桜咲里を眠たく通りけり　夕楓

日乃入や舟よんでゆく桃の花　一髪

のどかさや湊乃昼の生さかな　荷兮

出かはり脈くうしろすがたに杉ひぬる　芭蕉

ある人乃餞別

わかしきん涙拭ひて笑けり　除風

麻刈ぬる小舎煙見て哀やさとき　乗松

数ところうられ夜明る旅寝哉　昌碧

めつらしき宿や柱見出市乃家　松芳

貧家なるその大なり一寺は柴　傘下

芭蕉去を送る

稲妻にさしてつまさる別れ哉　洛言

なつかしく旅寝するは秋乃蝉　一井

あき風にすゝむる日さるゝそられ哉　北枝

拙いふしきさく秋乃かなしさよ　舟泉

男ふ行をすゝるを松にえてしぬるを

さらしなよ行人こゝろむかて　嵐弾

更級乃月を二人に見つる哉　荷兮

越人旅立けるよしきゝて京乃戸つけなむ

月より脈摘つ秋をこゝる乃うく　野水

おくられつおくりつはては木曽乃秋　芭蕉

藤乃実も見もちり行秋のいれ　路通

粉冊橋とのふ指甚角乃はなむけ

によくられしとて

狩衣稲に露をつゝて秋乃山　荷兮

とゆかし稲葉も露も落ぬらむ　京 ちる

入月に空もゆるしてまつるまで　玄察

能きけれ　紙や雪に行きあひたまへ　一井

品川まで人を見おくりて

澤庵乃墓をまつれの秋の暮　文鱗

草枕犬もしくるゝか夜る乃聲　芭蕉

旅なれぬ刀うしろにて村しくれ　津島 常秀

鳴海にて芭蕉子に逢て

いく霜に驚られかし神ほうらひ也　荷兮

髪をえらし桐織に綿乃人よりり　飛水

其角にウつりて附

あくた川さひしりきてつる雪の宿　荷兮

天龍でたゝかれたまへ雪乃暮　越人

うつ尻乃すまゝにゆくふる哉　傘下

里人のまくりはうきし乃宿　宗因

越人と吉田乃澤にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉

旅寐してみしや浮世の煤拂　同

述懐

草庵に暫く出る時

きゆる時は氷もきえてはしる也　路通

子を独守りて田守の嫁か那　杖宣

余所乃田乃誰入ぬも浮世哉　落梧

こゝろ勝なく

蕣はたゝきも恥かしの奥の院　杜国

桜より咲はおそかる花会式　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉

おやまさん卯花さくものつゝじ哉　落梧

さゝら入湯をくみかけり一盞　旧白

一本の花すゝきもあかる経ぬ哉　杏雨

肩衣を続ぎてゆかせ老の夜　杉風

似合しや白髪にかつぐ麻木売　亀洞

九月十日素堂亭にて

かくれ家や咲先菊の中に残る菊　嵐雪

うら家と貪るまくの稲穂哉　暁雉

人のいゝかけとて

されはこそおれにさきかれ菊の花　芭蕉

旧里の人にいはれて

こかし花もあかるゝ小ゆひ哉　杜国

鎌倉建長寺にまうでゝ

落葉かく身をはかぬるあかりかな
あるく人のりもゝやすく落葉哉　越人

一葉散して

わら紙なる落葉に焼や蛙さうの　荷兮

古仁のまゐりしまゐる暁

出ちゝ絶ぬの暖甫や冷ん燈の声　嵐蘭

梢乃せみ子親ぞ見られん脱ぬ哉　去来

月や遠く耳やちかきにほとゝきすの声　西武

ふるさとや臍乃緒に泣年乃暮　芭蕉

さひしさのあるじと杉のふくろうの声　除風

老となるくして賢出んとおもふかな

行年や親に白髪をかくしけり　越人

恋

妻の無に思ふ人乃妻ゐ哉　伊勢　一有妻

きぬきぬや余所にとようも時鳥　除風

婦屋出されなみかなさるゝ別かな　岳虹

むし干乃間に立極子り哉　文潮

虫干に小袖を見ぬる女かな　孝文

さとめし妹が頬は荒まなかりけり　心棘

六宮粉黛無顔色

後宮乃稲妻消ぬ月の顔　長虹

一笑さ人待かぬる顔をとり哉
さひしなれるよ　尚白

つま形しに家こそもれ女郎花　荷兮

あり有て薦に啼るつまにこゑ　小春

妻乃名のあらそひかくし縫入り　越人

松の中関の旅乃ちそへ哉　俊似

嫁ゐひ火燵を帰くいなかむ　舟泉

うらみ有る火燵消るゝ別れ哉　嵐蘭

山畑よりのおくりや芥川　松芳

きぬしをも敷てゆくて庵の夕り　冬松

おもかりしやまぬく乃比禰ぎ　昌碧

無常

末期よ

落る花を南無阿弥陀仏して夕か　亭武

生死迅速

咲ハ散つ忘る事ぞそしりの白気か　傘下

末期よ

南無や空さしても肉のほしきくん　堺　元順

松坂の浮瓢より人の身より

さるをうはひけりけり

橋の名の残りて散る花ぞきりや　荷兮

いかしさの追ちらすゞり

三乃くくよかなしく消る蛍かな　京　去来

あるくみるしなりれ乃兩すまじん

あさ花の小瓜とも見ゆるちらさ也　荷兮

世をそくや妻乃身すまりりのは

糸あそびの桐の葉かとちりぞかし　野水

辞世

あさ涌きし姥竜一つよをエ斤

子のまとれ乃比

似さ就乃あくき出さん一羅り　落梧

一原妙ふく

糸くましや小町の花の見ゆるかな　鴎歩

妻乃追善けり

とこしへにその里人をわすれなむ　自悦

李下の妻の七めぐりをとむらひて

稀にきてや迦しゆくかはやや　去来

ニ親身まかりし後

その人や瓢さくなくし秋のくれ　其角

母におくれたる子の哀れを

かなしさや釈迦より会ふて秋の暮　尚白

ある人乃追善けり

埋火もきゆや涙の烟る音　芭蕉

旅にしてみまかりたる人に

あハれやのとしのぬかるに消えなり　嵐雪

ありし日やなきがらの夕月　かゝゝ小春

釋教

伊勢にて

神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

眉のくる毎おもひしりけり涅槃像　嵐雪

西行上人五百歳忌に

その昔きけばこそ明るさもみつ　蕉卯

おもはしき遠忌に

連翹や世をわすれし花瓶なり　胡及

うつくしき蓮の葉かくれ二王門　松芳

木履もく催もさかり雨乃花　杜国

法の山を扇にたくぞ花乃寺　冬松

花に酒僧とも侘ん塩さかな　其角

貞享つちのえ辰乃釈孫生一日
東照宮乃別當僧正乃御房にまうて
大師遠忌を勤らる法華八講の侍る
としそるきさるのみかれし徳宮がまうて
声品乃ころ哉

散る花乃ゆりさんむくしをあふ　越人

女房乃聴すみしなえゝ法筆
字れそく咲きさわかり龍女成佛の
ありゝる志のひあへれ鼻がむ声の
しりそ

ほろくと落る涙や画ひ乃玉　同

翻す色尾上乃櫻咲よりり　俊似

古寺やほうかさぬ人の董草　一井

八島にて

海士乃家耶よひらむ深生ぶ　伊勢 千閣

咲よりも画人来ぬ青紅牡丹　一井

夏山や本後し乃江湖みえ　蕪集

奈良にて

灌佛の日に生れあふ鹿乃子かな　芭蕉

灌佛乃そら波清しきうかまひ　尚白

こゝろ掛にて

腰乃あふきれ繁みたる乃山ぶ　加賀 一宅

旅にふるく庵一日乃清水かな　一笑

十如是

わりつるゝ流れゆく通るしるべ哉　荷兮

即身即佛

夜陰乃気を扶る人乃佛哉　愚益

ほころびや給の縫となる夜哉　嵐蘭

わらくや門ありてあまり施餓鬼棚　荷兮

打ろけ乃火をとるむしのうらさよ　擬丸

石篭に施餓鬼乃棚のこしま哉　文里

魂祭ふりし架婦を向ひけり　亀洞

たまゝつり道にてあふよ無縁哉　卜枝

接待のたらしらえさでん松の陰　野水

平等施一切

接待にうえひら人をと絶なり　俊似

稲妻に大佛ひらむ無弁哉　荷兮

垣越に引導放くそ出銭哉　卜枝

ある人四明の景地にて水鏡に不食不闇をん事を感じて

霜にも居るをうらむす

居くえぬ佛ありかなしさ　荷兮

あるきの魚ふるに

葬式に衛手の鼓かりけりて　其角

ゆくさの虫々坊主わうしや内のかみ　一井

源のうふれ縁をうらる法師哉　卜枝

人のなりくにあつまててらむ出しに

たうふまさざるなれそ

衣かへて又なれしたり一時雨　嵐弾

譲念乃安国論きこゆく

なつかしさの涙や直まなこかん　越人

古手乃店

曙や伽羅蔵し乃店見世　荷兮

日

雨の夜やうるる二王乃隣腕　俊似

つくり立ちこかされもせしかれ　一井

蚊森する人のさかりや許しき　文潤

千歳ふるもかせりし盃のくれ　甚角

蘂品七句

如盲者好矣

まつ白まじめの咲きけりふくろふ　胡及

如裸者得衣

雨の日や酒樽捨てあまの家

如商人得主

双六乃ほうふてよむころむつかし

如子得母

竹ふくおけそらつくさんけり

如渡得舩

身乃は凍乃枝末きさまなり

如病得醫

かろくらき清かつ見舞山でふ

如暗得燈

秋乃秋やむかしゆかしき記さま　錦石

神祇

古ゑや雪消かゝる獅子頭　錦石

二月ある奉納ゑ
紀さしきや九つ乃月の梅　萩竹

きんくしと梅ちりかゝる庭火かな　同

覚るもあか出てこそ神乃梅　亀洞

上下乃さらしぬやうに神の梅　昌碧

紫の幕かゝる子りの梅乃中　錦石

何の中へ紀元ゑましき梅の紀　哉人

ゑんしらへあまたにさゝる神の梅　兵衆

月代もまうらずや梅乃宮　雨柏

門あけて梅乃端籬わけ入り　宜友

捨てられる人の後乃さかりかな　玄祭

花よ春く遠州かきまわる社かな　純可

京乃後川流れまかるさかりかな　李桃

流る洗乃末芽ぶ乃中の垣かな　好葉

浮きしき神楽の月を通りけり　玄寮

家る乃灯をかゝる火串かな　亀洞

破扇てならふる神楽かな　未学

川辺遠一瀧きされる清楽かな　荷兮

こかしし里乃子歌く神輿かな　尚白

此月の志しは次ハいちよおみかんかな　松芳

みさしれや祢宜乃さけゝる油筒　落梧

若ゑびす納

きしもぬかもめし神々に　利重

絵乃方と千條ゑ見えし夜の神にハ　卅水

諸康川表唄乃旅寝非にハ　昌碧

かつしきれ引かれふくさ庵大ハ　村俊

楪梲や巾積りくる煤払ひ　卜枝

祝

肩付をいくよふるめぬ若菜し　名文

　菊かけ乃草乃葉よ

幾千も作り経よえゆるかな　宗也

君か代やこゝろくまれさ玉つくさ　識人

若葉も紛れもされ汁乃石　傘下

いきゝと海老乃上なる杖つゝん　亀洞

千代乃秋にあやかりたしと家

　志らしかくれぬる人なりけりは

先祝へ梅を心乃冬籠　芭蕉

曠野集

[illegible]

時節　　眠

曠野集員外

誹かいを好もの多く世のあそびのなかにありて能のりしきを見人丹羽下藤東四明の騒客あまた花乃ちかひをこれともしゐて信州田長六のよしの山あさからしとのへるおもを實なりんすまた妻倉しけるしるしとかゝれ代此る尾陽乃野水子乃伯よく芭蕉翁の侍しゝどかをきりすけにさいう此田野へ舟をうつて宣なる此るを感さてむかしあまたあるの人乃中に鹿乃拙絶せしまたつみ追されさる人ありて独色を愛しけるかし誹乃おかたへりしさりくのたのしく猿を啼かしむるにある三声乃あはれをしるも實乃字者杜のうしろあるや糸屑の句をきゝて

素堂

冬をうつされ蕣におくれぬ庵哉し

この文人乃ひとつりてとゝけれしを三人開さ歌をも吟して

ゆふさきしかされ岩乃けふりに　野水

橋の路も青よろ甚乃黄く　荷兮

もろ声つゝあるれそし菜そり　越人

門の石月待闇乃やすらひに　水

其場　起情　時節　起情

風乃月利を動秋乃雲　兮
武士の高名川山もかと遊し　人
志とりよつゐて瀧乃流るゝ音　乕
緒よりゆるを出とさえ乃うく人　兮
降やて瀬ゝれて邑る郡ゝ雨　人
立ち見松明出きる衣乃端　乕
千句して高む心山乃てゝら　兮
蛇さかゝ一年櫻も咲残り　人
あてゝもやうさめ月衣ゝ　乕
宮深乃牙ハ泥のやう高る梅花　兮
秋號ふを高く盗人乃妻　人
悔る中ゝ西も東も鐘の音　水

時節　柏子

さらなる利松の川舟　兮
乕乃日のてかしとしてき墨う　人
承ふよ乃しと羽織うちきて　水
ふうしときの市の塩いまき　兮
狐つきしや人乃見らう井　人
柏木乃脈氣のせ乃つくしと　乕
さゝやくしのこゝふ中えつる　兮
肉乃錺とり合乃辻相撲　人
秋よ高るより里乃湯桶　乕
寄しられ歩猫よ出る笠けふ　兮
うれしと志のよ不破乃茶館　人
かしこまる諫よ涙こほしけり　乕

今新　起情　今新　甚場用

一 火箸のさきて手のあつきさし　兮
うくひすのうそやましく人のこゝろよき　人
ちせさしくゆるく池のかへしを　水
萩さう雪 籠りゆきさ定らん　兮
粧ふく みちぬるなか焼たる梨　人
宮そうかんさむ月しれかとれて　水
大根をうつく 干しいそかし　兮
遠浅や浪にしめさる蜊とる　亀洞
はちみれなまるん湯乃名をとふ里　荷兮
一 のとかしやすさき酒よ帯を解き　昌碧
一 百足乃懼る茶しるきの梨　野水

甚人　員外物数寄　甚場

夕月乃雲の白さをうち添　舟泉
秋さへの暮を待よらきせ　羽笠
萩の露置こともなしぬれそや　年
一 結ふ色して 見も古綿　亀洞
芝乃庵よさる巻しさる宜禄の麻　荷兮
京まて移して松毎に年栄　昌碧
いつくしかまくらさめては藏造　羽笠
一 湯殿まての道のほとりも　舟泉
一 添ふしやし蕨りつくる川乃端　野水
さゝかされしや行得月　荷兮
秋風よ女車乃髪板さこ　亀洞
神々さ離ゝさ般若の法輪　羽笠

今荻

起情

時くふすのさへくらぬ花の奥　昌碧
八重山吹ハちらちらとし　冊水
日のさしてや乃ふハ何せん暁まよ　乔泉
むやとけよ土もし嫩に剥　亀洞
向すくし実やるのらのかて　荷兮
垢離ゝく人乃ゑとの此書　昌碧
砥石水ゝ丁寅乃加減覚えて　納雪
おこるふるまるの別く　乔泉
むく頼よ抱いふつく赤膳ま　冊水
門をとるけ茶すまむこむ　荷兮
ひとこくて星野町乃藪深し　亀洞
ねりむ連てりされも高田派　納雪

觀相
今荻
其场

畫もつとるとろりの下々の月　昌碧
やとまつ秋乃山とあるとまひ　冊水
つれくも折かきは陣屋の窓　乔泉
手者自をゆき安房の小湊　亀洞
皮のりやとるつまに泥の照り付て　荷兮
桶乃かつらを入しまひたり　納雪
人まなよ服やさて極まなる　昌碧
ついゝらもれ為る精進　冊水
ゑましき鰷うきとりよき乃水　乔泉
柳のうへ乃かまきりの卵　李芳
夕霧深掘よくてなえくさん　冬文

其人

歩返之場
起情

きりきりすやうやう聞ゆる月影　荷兮
秋草のとりもなをさぬ咲みだれ　松芳
弓ひきなをる膳お構なく　舟泉
名ふも知らぬ松笠ちらし出る　荷兮
あかつき砂の中の水のもし　冬文
火鉢の坊の名をわすれたく　舟泉
流れてしとうち寒自らして　松芳
言葉より踏へしてを慕ひける　冬文
酒乃出るま借らさく名所川　荷兮
幾年秋作れもせぬ紅葉き　松芳
たらしく乾麦の線を先きまる　舟泉
はふれふもうち去ぬる花の色　荷兮

試相

其場

其人

月の影や兎す井乃石　冬文
新ずみを打しかつえる風　舟泉
野鍛冶らうらぬ紹息乃うへ　松芳
降辰も入業を其の来ゝかうりし　冬文
十日のきく乃はしまらめし　荷兮
山里乃秋め留りしと生鯔　松芳
先結ひつくらるやさむ　舟泉
さらくしをそう枕を流る月の影　荷兮
馬乃しゝをはねるのつくく　冬文
さりしさを名井乃名のおれ雨　舟泉
薤婦ゝくつ蕎麦おしつゝゝ　松芳
つくしゝ絹まゝる身のうしょうき　冬文

曉ふかく挑燈家によむ　蕪亭
けしの花とらるまではちかよりも　松芳
味噌とるるそこの壊さへうし　無泉
業露乃門さまざまけるに新らし　蕪亭
後背しよあてうるまかれ　去文
去の紅赤見とるきておりく兜　無泉
新つんさよみとる放出旅しぬ　松芳
きさらぎや瀑布を雲に松をこめて　和文
そうく面ぬきし山口乃家　荷亭
あらしきに結ぬんの杉もあり　荷亭
雨乃ちそのうちまよしをとる戸乃に　冊水

引すてし車は琵琶乃かざごえ　同
あらしきされども人のうらかなし　蕪亭
有の秋旅の志さまいつるく　同
一荷かふかりし落のきさらげ　冊水
初おらしまつせ氷寮乃坊また　水
菜畑うむふてくらくるけるら　亭
土肥をゆめしきよまきよ継く　仝
市判柳と袖を拋う哉　水
通路のついでけて迎ひつる　仝
六條よありし恋乃うかまきさ　亭
代まうたところもしと語れれて　仝
濺一貫よ鮓一節　水

観相 時節

月乃能営はりよりいそく舞　仝
花咲かゝりしんまゝの京わ来　兮
天仙蓼ま冷食あはし春の暑　仝
うきうし○けよ宵経乃中　水
たく人とあちて藪あらちもとも　仝
夕せうしき酒つりしてやる　兮
駒乃やと豚自ら絵浪り六早変　水
秋乃あはしるよ昔降擬濡　兮
納そそとくもまあよりは生え縄　水
八日乃月乃影とさとつるかく　兮
山乃端よ松と柳よのかどある　水
まつき良とあふらくしとある　兮

其場　其場

若きさ日や狼うけ斗川出すん　仝
大鼓なきまよ猶子の有るう　兮
こうしと森さる本質の草枕　兮
象さく乃ときと鉦鼓よ打ち　水
急ゆるも来るぬ静て一二年　仝
庭をつくく経始をそらと留　兮
三方のねむつりと遊ぐる　仝
供奉乃草鞋を谷へときこと　兮
脇くや小塩大原嵯峨の花　仝
人松ひよりける乃川岸　年

月さしの白る辰丈六立乃日暮まあくある

有心

杉毋しろさに柄をさしてハよき團哉
宗鑑法師の句なりしか其夜の
森乃森にもすみしをよそに紛れてきぬ
月に柄をさしたらハよき團哉

坂乃杉るとゆり夜の衣の森　越人
とつりと涙に盃をへきころりん　傘下
杉毋ひかりにきこゆせぬきの空　同
青み杉つりへ杉まてよりかへ　人
使乃者に返すかゝ刻きされ　同
あれこれに猫乃子を遊るさまくよ　筆
としさつるまくに河やうしなり　下
よそて十の年の鮹をせく抱とし　同

弁返と坊

其人

時合

一すとは杉のおけに泡をうかへた貞　人
大勢乃人に法華をとかされて　同
月の夕に鍋瓶縄う川　下
喰ふ柳も又くふ柳も紫し　同
秋のくしきれ畑みる哉　人
りのすゝれいつか世をすくへき　同
寐ながらも書すふ字の中のむ戸　下
花乃盛よこしへ出る泌葉つ　同
名のすのく椀乃こともき春風　丈
うら殺く浦の昔語乃没千人よ　同
内へはいりてお仏をゆる　下
辞さ扱んのかの飲さき比なれや　同

いくきつゝなる雨の降出し　人
歌合稽古襌着まいして見く　同
すゝき献立乃こゝちかひけり　下
町衆乃油こぼして押かくし　同
白をおもとせんまつりしと飛　人
ふく風よ忍のこゝろ草のふくと　同
半はさかれ流や乃秋　下
おつくしと有ころ龍の歎よ似て　同
人の読よ八さゝりてもれし　人
汲きつしく瓜や茸をおゐ出　下
手せ浮舞乃こゝろ小町中　人
打かへしと小法乃者の昼財　下

皆日暮まで一念仏　人
百萬もくるひ出と花を見て　下
田楽きれく桜咲しき　人

深川の夜　越人

鴈かねもしつかにきけはからひすや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめてつらん　仝
理をはなれたる秋の夕くれ　越人
瓢箪乃大きさ五石はかりや　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なにゝても長安ハ是名利の地　仝

匡乃杉かこミて碁目くるわしれ　越人
いそかしと師走の空に出ありく　芭蕉
奈良より出合の寺乃油しらう　越人
此里に古き玄蕃の名をとへば　芭蕉
足駄はかせぬ雨乃あけぼの　越人
きぬぎぬやあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
風ひきたまふ声のうつくし　越人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路しばらく　越人
宿と花ゐはれ乃名根を尋て　芭蕉
雲雀啼つるころの肌ぬぎ　越人
破垣戸の釘うち付る春の末　仝

一月見よとさしむしき雲のはきかさ　蕉
一高ぶくて服紗につゝむ十寸鏡　人
その杉りわかる神子の拍子に　蕉
人去ていゆきき法坐の自恣なる　人
神開は飛る堂乃隅　蕉
わかくさは光気のあつく見ゆなる　人
短穂のさしけ露ハこぼれたく　蕉
あやしくに物に妹かみゝにゆるゝ　人
須の雲をたつる尊むそ　蕉
一坂月のそとの雲を消されん　人
一佐も遠く鐘よりかかり　蕉
秋乃田をかりせぬ公事の長ひきて　人

さいしあらう文字関にくる　蕉
うつゝなく庭乃木の葉や　人
雑逆さる子乃穂でかふなき　燕
なものは詠義をもうしかまし　人
四方しをもつて吟きぐち　其

翁に伴なはれて来る人のめづらしき

若えらに蔦字の文や天津丁　其角
三夜さの月見雲なかりけり　越人
菊萩の庭に畳を引つけて　仝
飯くゝりうし茶をまゐる　角
涯りあつく添まうけたる夜衣　仝

面影

歯ぎしりはさへあかつきのゆめ　人
恨ゝよる涙まつさみそでまりて　仝
静場に葬をとゝむる　角
空蝉の離魂の煩ひ乃ねで引　仝
あしなかりける金二万両　人
いとおしき子を他人にもらはれて　仝
やけとなをしてこうつくしき顔　角
酒熟き耳につきたるさゝやきを　仝
魚をあつらぬ月の江の水　人
そめいろの富士は浅黄に秋の暮　仝
起ともしする草乃一瓶　角
饅頭をうらはさ袖につつみける　仝

観相　柏子　時節　其人

うき世につけて死ぬ人は損　人
西王母東方朔も目には見えん　仝
よしや鸚鵡の舌のみじかき　角
あぢきなや戸にはさまれし衣の妻　仝
恋の敵とも知らでのまん　人
やれ[illegible]の[illegible]たち出て　仝
茶つくる[illegible]師走こもり　角
夕鴉宿の長さに後の月　仝
いくつの笠を荷ふ強力　人
穴いちに塵うちはらひ草枕　仝
ひいなかざりて伊勢の八朔　角
満月に不断さくらを詠めばや　仝

員外
物故分

念者法師は秋のあはれ[illegible]　人
夕まぐれ[illegible]　仝
弓をさむる窓かけの中　角
[illegible]諸穿[illegible]　仝
そのきくてもらぬ馬士の亀より　人
花の香にあさつき膾こしらへや　仝
むしろなるべき嘆続乃夫　仝
[illegible]新居は人の碑なき　嵐雪
秋うそうそし いつも湯婦　越人
月の前書を引ちぎりかさねて　仝
かの面葉の草なりける[illegible]　名

今秋　今秋　有心　内湖

ふる雨のむく牧にまじらぬ里の暮る　仝
川越られて堤下のこゝち　人
疱瘡良の透とをる形ゝ歯の白き　仝
唱哥ハ志らず声ばかりやる　宕
ふくこゝみるそあれしのゝきさ雲をよ　月
淡きよくへりふるさをとるき　越
野ならは油あるするまゝき　人
修?もくかへる浪人　嵐
髭梅を植ゑてや一ツ脱　宕
明日擬をとる宵の月影　越
志ら客の群て涼める女客　人
つきなの医者乃後盗や　宕

其人

ちる花は日たらぬれども蝉　越
よふこゑは何をかふらん　人
初音やこそしのひとる桐のはよ　舟水
日のみしかきも乃紀　落梧
山川や稲の答拗をさんく　仝
糸遊を遠かくつえあくりうを　舟水
行先のさまに押合舟に草臥　月
おろしもし、も櫃の萩　落梧
川越乃歩にされ秋の雨　水
ねつく病る顔のきゝとふき　梧
ひくかせことわりふくさん橋の下　水

令秋　其人

起情

ときめきおろし此乃うききうむ　梧

定る秋乃湯をむつりと水飲て　水

ころくり郡をお終せん僕　梧

峯乃雲おろふおろりを見出ら　水

旅よとれうらのん寄弱藤さ　梧

京ゟさ丸呑なれさまとも一文よ　水

下戸ハ皆いく自の杉や乃き　梧

耳や歯やまうて花の数なるを　水

冬も見え絶さゝせるなりよ乃初年　梧

いつまても嘗ずぬ此杉くに　月

山伏僧て人まつゐおり　水

ふうくしとくさぬけゐる茶車　梧

有心

令秋

挑灯高く結園さきく純　水

於ゐすを泣なん髪を梳おそかし　梧

去りし杣をいそぬつれなき　水

まうしとやりる馬まうきのせく　梧

うら府中は船将つまり　水

雨やさら雲のちきりて面白や　梧

柳ちるそよ例の楚そ　水

新なりく肉をさかれなき十る　同

寂しよ秋を女夫ありけり　梧

たらを上るよ絶さるうしやまし　水

秦りてなやんいあしへの酒　仝

秋のこの干魚備るこり城よ　梧

観相

詠よりゐを先へ以ゑくしまる　回
まち百乃ゟゝり涼しえきなし　水
溺ふまちゝへと雲夜鳴や　柑
一里乃炭売ちゝつゑゝ笠　一井
かきもの先の籠ぬる紀　嵐璋
さきくさや西来を引よ添ゝん　胡及
肴ちゝつれ酒よよし人　长虹
夕月の入きは早き塩さハ　嵐璋
たゝゝに鯽をつゝこむ秋　一井
里涼く涌ちねよ二三日　长虹
ゑ目り妻よおゝられて憂　胡及

其人
今秋

問われても涼よ池のゑふくき　一井
首笠とくきとく切おくく文　嵐璋
うらくとゝ麻紀ちゝ温湯をまゝ　胡及
ゑろゆく出家の戯乃宮御　长虹
なゝふるゝるよそそをおかでハうち笠　嵐璋
蛤とりハこゝふ女中ふ利　一井
浦風よ朧吹ちゝる月涼し　长虹
みるもかしこき紀伊の血魂を　胡及
ゑの者あさし矢射く射る花の弦　一井
蒜くゝ香り遠ざかり　嵐璋
はつのくれおゝきくを聴ゝん　胡及
盛の子乃綿乃袂よ落つ　长虹

時合
起情
日ニ見てる
附

今秋

そゝみしさそる月もさひしくさを洗　嵐弾
庭露花しある姫屋を鍋たり　一井
一味をさこえにあつるうなりし松の枝　長虹
一緒よりかる人しし乃奥　胡及
此年よなりて条の路も萬てさ　一井
海くゝもせうそるつい森入月　嵐弾
釜るもゝく深子乃陰のうてさきさ　胡及
こきしゝ紅やうゝる志保屋萩のえ　長虹
浮ゐかゝ稜入まのくゑ乃えゝなりゝな　嵐弾
右引うふる人乃足音　一井
毒なりと瓜一きれも喰ぬこし　長虹
折風ゑらくるゝ黄白雨　胡及

挙句

板屋まさく蹈みあらき庭乃内　一井
ちるるの乃ぬけゝる皐き磨丸　嵐弾
ぬくしと白足乃書わぬ花曇　長虹
見ゆるまかしきこなつかしし　胡及

扨されはかれの道をよく千今は浪に
よけて豈此山の麓路にふかくもあらはれたる
よふあられは いさ出路おえく丑山はなうろに
わたる山崩にもあられて秋津洲のくにゝ
つとふるかもあれとも おほりさいそとして
に浜浦のさらにみつきまさる刈るし志
このおほけなくとみそのきかくせよりふか
まんとくほんおとるいとのかゝふるにゑ数
世にかはの言をなし海とれ世をつぬ
万人もかしくて蘇我信りきまして神杉

爲に志れよりてなか利をゝ無いきこなれども
かうれ俳ゐしれ俳人にれうしれいをゝめなか
紫いとくさらいと家とかせ綴よりて
おのづから出きもなくなかうる人しこの
ころち紀志かりてふりの出おる七部乃ふさ
を一まれして新して家の無あえくその奥
後を志るし乃んと世に綴へ奥の出し
太鵬館主人かいふ
安永はく永き三つのとし
長月九日

梓

俳諧書籍目録

諧仙堂藏板

俳諧七部集　冬の日　春の日　ひさご　猿みの　續猿蓑　あら野　炭俵　半紙本七冊

同續七部集　深川集　新席集　有磯海　小文庫　千鳥掛　笈日記　小本二冊

其角七部集　虚栗　新山家　花摘　萩の露　錦繍緞　雑談集　續虚栗　小本二冊

蕪村七部集　其雪影　明烏　一夜四歌仙　桃李　續明烏　五車反古　花鳥篇　小本二冊

芭蕉翁發句集　小本二冊

奥の細道　翁奥羽　泥足　去来本　一冊

芭蕉句選　支考選　一冊

續五論　一冊

笈の小文　一冊

枯尾花　翁追善　翁反古の記　二冊

俳諧氐尓波抄　北越大人口授　有国識　全部六冊
古来集の句くの手爾葉を詳しくしるして……
類題發句集　蓼太選　五冊
新撰類題發句集　同選　五冊
華實年浪艸　十五冊
新百韻　文考　一冊
字引 合類大節用集　文字出所和漢乃證出を委しく加ふる　十三冊
芭蕉翁古郷傳　有国校　二冊
翁幼冠の頃より晩年に至るまでの行状を委しく記し俳諧に関る所の附合文通句論四季の句……

安永三年甲午十二月發刻
文化五年戊辰十一月再刻

皇都書舗
野田治兵衛
浦井徳右衛門
筒井庄兵衛